

ポーランドに日本の詩を紹介するまで

足達 和子

八月の初めにポーランドに輸出する事を目的とした『ふゆのさくら 現代日本名詩選』を国際文化出版社から上梓した。

思えば長い道のりで、きっかけは十六年前のこと当時私はワルシャワ大学の留学生だったが、アウシュヴィッツとヒロシマのテーマをからめた日ポ初の合作映画が撮影されていたのに通訳として参加していた。その中で日本の女優がアドリブで立原道造の「のちにおもいに」を口ずさみ、ポーランド語訳の字幕を作ることに必要になった。それが著名な詩人、タデウシ・シリヴィヤック氏の目に止まったのである。

それから四年間、すでに帰国していた日本で、「あなたは日本の詩をポーランドで紹介するのが天職だ」という手紙を受け取るようになった。私はそれを断り続けた。私は辞書の著者だったのだ。しかし、熱心な勧めにいつに説き伏せられ、やり始めたのが一九八二年、それから数えて十年目にこの本ができた。

途中からワルシャワ大学日本科のヴィスワフ・コタンスキ名誉教授に共訳をお願いすることになった。日本語のできるポーランド人とポーランド語のできる日本人が互いに補足し合い、翻訳することが、どうしても必要だった。その訳にシリヴィヤック氏が詩のトーンの点で手を加えている。

詩人と詩を選択したのは共訳者唯一の日本人である私で、明治初期のまだ文語体で詩を書いていた時代は除き、野口米次郎から高村光太郎、山村暮鳥、北原白秋、萩原朔太郎、三好達治、中野重治、草野心平、堀辰雄、中原中也など、日本で誰にでも知られている詩人百十三名、その代表作百九十七篇を採り入れた。

左頁に日本語の原詩を、右頁にポーランド語の訳詩を載せ、二カ国語版とした。ポーランドではワルシャワ大学に戦前からの伝統ある日本科があり、近年クラクフ大学、ポズナニ大学にも新設され、日本語を学ぶ学生たちが増えている。これは教材を提供する意味もある。

日本の詩がこれだけまとまった形で紹介されるのはポーランドでは初めてである。したがって日本の詩の

歴史に関しては基本的な知識が無い一般読者に、古代から明治時代までの韻文の歴史、明治以降の近代詩史について詳しい解説を提供する必要があった。それに約八十頁とり、総頁数は五百八十五。ぶ厚い、美しい本になった。

出版部数は一万部である。日本では詩集は五百部とか、多くて三千部止まりなので、一万部と言うと目を丸くされてしまうが、しかし、ポーランド人はとても詩の好きな国民なのである。人口は四千万と日本の三分の一に過ぎないが、子供でもホーム・バーティイなどで好きな詩人の詩をスラスラと暗唱したりするから、五万部刷っても恐らく一週間で売切れることは間違いない。ただ、ポーランド経済の混乱から訳者自らが出版費用を全額負担しなくてはならなかった事情があり、一万冊に止めるを得なかった。

この本は当初ポーランドの出版社からごく普通の国内出版物として出版される予定だった。しかし、ポーランドでは国から紙を受け取るのに五年、八年と待たされるのが普通で、

当時その傾向が悪化の一途をたどっていた。十年、十二年と待たされるわけにはいかない。どうせそうするなら日本語の活字も使い、二カ国語版にしたいとの夢も生まれ、その場合、講談社国際室から利益を取らずに協力していただける約束もした。

しかしポーランドの混乱は進むばかりだった。結局、ほとんどの過程を日本でせざるを得なくなり、そうなるに印刷費も製本費も日本の物価でかかってくる。ポーランドでの販売価格は一般のポーランド人が買える程度の値段にしなければならぬから、つまり経費が売り上げ後の回収金ではまかなえない。全く採算のとれない出版物になったのである。

このような場合、少なくとも数百万のお金をあらかじめ作らなくては出版は不可能で、しかもその荷は日本人である私が背負う他ないことになる。

結果的にこの本は八百二十万円（直接経費のみ）必要とした。その費用の捻出は――。

まず全著作権者から、この事情を説明した上で、著作権無料の許可をいただいた。次にこの本の出版を、それに意義を感じてくれ、利益なしで引き受けてくれる出版社を見つけるところ。講談社系の国際文化出版社に引き受けていただけたのはとても幸運で、他にはもうこういうチャンスはなかったと思う。最後に費用を作るのに、公の基金に合格するように全力をあげた。

最終的には国際交流基金から百九十八万五千円、サントリー文化財団から百万円、セゾン文化財団から七十六万円、アメリカのパディレフスキ基金から五千ドル、計四百四十万円の援助を受けることができたが、三百八十万円が不足し、これは私の自己負担になっている。

翻訳はもともと、十年の勉強を必要とするものでありながら、日本では他のあらゆる職業に比べ、最も金銭的に恵まれない仕事である。それが英仏独などの主要言語でない、特殊語であればなおさらで、相手国が経済困難に陥っていたりすれば、それはもう言語に尽くせない窮状を強いられる。つまりこのような本がこういう国に紹介されるのには、翻訳者が（経済力の豊かな国の方の翻訳者が）霞を食って生きられるという誠にもまれな人でない限り不可能で、そんな仙人に近いような性格の持ち主は各言語にひとりふたりしかいないはずだ。

最近新聞などで、「日本の翻訳一〇〇冊の会」というのが発足したと報じられた。日本文学を海外に広めるのに企業から協賛を募って翻訳者に援助金を出すとのこと、一件につき百万から三百万が支給されるということ。むろんとてもありがたいのだが、しかし企業が乗り出すのなら、どうして五百万円とか一千万円の単位でないのか。百万では翻訳者の——最悪の状況と戦う翻訳者の負担のほんの一部しか埋められない。ま

だまだ翻訳者は貧乏でいいのだという考え方が残っている。また、どういふ場合の、どの国の翻訳者が大変なのか、詳しい状況がまだ理解されていないように思われる。

社会が混乱した国と仕事をするには、この他にもさまざまな闘いを強いらられる。郵便のやりとりひとつにしても、遅配あり紛失あり、あるいは電話の不通に悩まされ、事務能力の欠如に阻まれる。日本式のテンポではとうてい事を運ぶことはできず、そのためストレスがはなはだしい。神経がやられないように注意することまでが必要となってくるのである。

この本の場合、出版後もまだ苦勞は終わっていない。配本を依頼した国営配本会社がやはり日本のようにはゆかないのである。ポージランドでは今、どこの職場でも移動が激しくここでも先の担当者がふいに辞めてしまった。すると他の社員たちも何も分からないので、社内機構や働く人のモラルが、退職するならば任者にこの件を引き継ぐというようになっっていない。手続きは目下、一からやり直し中で、出版後もう一カ月以上経っているというのに、いまだに横浜からの発送ができないでいる。

ポージランドでの販売価格もまだ決定されていない。というのも、ポージランドでは毎日のように物価が変動してしまい、そのため価格は本の到着後にやっと決められるからである。それだけではない。ロシアの混乱

までが加わった。輸送は当初からシベリア経由の予定で、船便も考えたが、それはそれで一難があった。したがってシベリア経由で送るとなるとロシアをことなく通過するのか：。この本は最後の最後まで心配させられることの連続である。

こうなると、ここまで苦勞して、なぜ翻訳者はそれでもやるのか、ということになる。それはこの本が未長く残るとの思い——。明治時代に初めて西洋の詩が日本に紹介されたときのことなどを思うからだ。利益の得られない仕事であればあるほど、決してゆるがせにはしなかった。訳はこれ以上推敲できないと思うまで繰り返した。そのため訳者同士が喧嘩になることもあったが、それでも後に残るものの質を落とさぬことを第一とした。だからこそ、五十年経ってもポージランド人はこの本を通して日本の詩を知るのだと思うのだ。それが翻訳者の唯一の喜び、密かな楽しみなのである。

足達和子出版リスト
音楽之友社
「贗作シヨパンの手紙」
「ものがたりシヨパンコンクール」
共同通信社
「ぼくはナチにさらわれた」
講談社
「ガイドブック世界の民話」
「世界の昔話 上・下」
ワルシャワにて
「日ポ・ポ日小辞典」

編集委員から

昨年の日本翻訳出版文化賞を受賞した『ふゆのさくら』の著者である足達和子さんは、人づてに「北海道には同学の仲間が沢山いる」と聞いて、今回、当協会へお便り下さいました。「この本を皆さんに紹介していただければ……」との内容です。『ふゆのさくら』は日本の新聞等でも取り上げられ、足立さんが本を贈呈したポージランド出身のローマ法王ヨハネ・パウロ二世や映画界の巨匠アンジェイ・ワイダ監督からも激励、絶賛の手紙をいただいたそうです。

購入をご希望の方は左記の足達さんの口座にお振り込み下さい。（国際文化出版社が講談社に吸収されてしまい、今はこの本の全責任が足達さんにあるため）
上製本で、一冊、八七五五円です。
振込先口座
さくら銀行ひばりヶ丘支店
（普）四〇五四八五九

連絡先
203 東京都東久留米市浅間町3-27-8
足達 和子 (0424)21-5820

「ポレ」編集委員会
斎田道子・清水保子
吉田 宏
「連絡先」621-1738（斎田）